Osaka University Knowledge Archive

Title	Preliminary Evidence for Reliability and Validity of the Stirling Children's Well-being Scale (SCWBS) with Japanese Children
Author(s)	西田, 千寿子
Citation	大阪大学, 2021, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/82358
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　西田　千寿子　）	
論文題名	Preliminary evidence for the reliability and validity of the Stirling children's well-being scale (SCWBS) with Japanese children （日本の子どもを対象とするスターリング子どもウェルビーイングスケール(SCWBS)の信頼性と妥当性の予備的検証）

論文内容の要旨

［目的］

現在、学校におけるいじめや不登校の増加、そして、社会的情動性の難しさが日本子どもたちの問題として顕在化している。学校ではエビデンスに基づく多様な心理教育による支援が行われているが、問題の減少はみられない。また、それらの支援のほとんどは不安や抑うつなどの問題に焦点をあてるアプローチである。そこで、ウェルビーイングやポジテイブな側面（楽観性や自信など）の向上に焦点をシフトするエビデンスに基づくポジテイブな実践が学校で求められる。そこにおいてもアセスメントは重要である。子どもの特性や社会性を診断するアセスメントは、特に幼児・児童の場合、保護者や指導者に回答を求めるものが多い。しかし、ウェルビーイングについては、子ども自らが回答する自記式尺度が必要であり、日本の子どもたちが日本語で自ら回答できる尺度がなかった。本研究は、日本の児童を対象とするウェルビーイングのセルフ・レポート尺度が必要であると考え、その開発を研究目的とした。

［方法］

本研究では、イギリスで開発されたスターリング・チルドレン・ウェルビーイング・スケール（the Stirling Children's Well-being Scale :SCWBS)を翻訳し、J-SCWBSを作成した。SCWBS (Liddle & Carter, 2015) は、8～15歳の子どもを対象とする15項目5検定の自記式尺度で、信頼性と妥当性が検証されている。15項目は3部に分かれ、ポジテイブな感情（主観的ウェルビーイング）を測る6項目、ポジテイブな展望（心理的ウェルビーイング）を測る6項目、社会的好ましさ(Social Desirability: SD)を測る3項目で構成されている。翻訳するにあたって、まず、SCWBSのコピーライトを有するスターリング・カウンシルより、J-SCWBS作成の許可を得、自記式尺度のクロスカルチュラルアダプテイションガイドラインであるBeaton Guidelines (Beatonら, 2000) の手順に従って訳した。和訳には2名、バックトランスレーションには1名と外部団体（翻訳会社）が当たった。4名による検討委員会を設置し日本の文化・環境に適応したアセスメントになるよう議論を重ね、J-SCWBSを作成した。

J-SCWBSとともに、WHO-5（ウェルビーイング尺度）、SSSC（ソーシャルサポート認知尺度）、SDQ（強さ困難さのアセスメント）を併用し、妥当性をピアソンの相関係数で検証した。ただし、SDQの児童用自記式版は、8歳からの適用となっているので、1・2年生（6・7歳児）については、SCWBS、WHO-5、SSSCの3つを使用した。信頼性は、内部一貫性、再検査信頼性を用いて検証した。

［結果］

データ分析の結果、J-WCWBSの15項目は小学生に理解できる尺度であり、日本においても子どものウェルビーイングを評価する信頼性と妥当性が有すると確認された。信頼性は、1・2年生では妥当な(12 items; $\alpha = .86$)、3年生以上では良い(12 items; $\alpha = .93$).結果が示された。 一週間を隔てて測定された再検査信頼性は、1・2年生で$r = 0.66$ 、3年生以上で $r = 0.86$ であった。妥当性はピアソンの相関係数により、構成概念妥当性と収束的妥当性を確認できた。子どもの質問理解についての教員評価は、平均値は4.37(SD=0.72)であった。質問13（いつもおやつをわけあっているよ）が最も低く平均値3.00（SD=1.53）であり、質問4（楽しいことをたくさんみつけられているよ）・8（じまんできることがたくさんあるよ）・12（みんなと仲良くしているよ）・14（元気いっぱいにすごしているよ）は平均値5.00 (SD=0.00)であった。1・2年生には5検定で答えるのが難しいようなので、測定するときには教員の適切な指導が必要になるだろうという意見があった。

［総括］

社会文化的適応を図るためのガイドラインに沿って開発されたJ-SCWBSは、信頼性と妥当性が確認され、日本の

学校において有用な尺度であると示唆された。しかし、低学年（1・2年生）では、中・高学年（3年生以上）に比べて、有意な値ではあるものの低い値が見られた。低学年児童に対する実施には適切な指導が必要であるという教員のフィードバックに一致すると考えられる。しかし、パワー計算を行ったところ、低学年児童の参加者数（N=46）は有意な相関係数を得るためには弱かったと示唆される結果がでた。今後の研究において明らかにする課題である。

SDを測る3項目は、イギリスでの研究結果よりも5.7倍高い値が示された。社会文化的な背景、他の質問紙内容との関連など多様な要因が考えられる(Kawauchi, 2009)。Camerinｉら(2018)のウェルビーイングの研究において、SDは家族関係とピア関係を有意に予告するという結果があり、研究者らは子どものウェルビーイング尺度にSDは必要であると主張する。一方、Caputo(2017)は、ウェルビーイング尺度とSDの相関は高くなるので、SDを含むのは無意味であると述べている。SDの必要性や役割については今後の研究において検討したい。

本研究は次の点において評価できる。1、イギリスで開発され有効に使用されている子どものウェルビーイング尺度をガイドラインにそって翻訳し日本語版を開発した点、2、日本の小学校におけるデータにより信頼性と妥当性を確認した点、3、日本の学校で進める子どものウェルビーイング促進に活用できる点。一方で今後の研究課題があげられる。参加者は一地方の一小学校児童であり一般化できるサンプルではないこと、サンプル数が小さいこと、SDの3項目をどう解釈するかの3点である。

本邦においては、子どものウェルビーイングを測定する場合、保護者や関係する大人の評価が主に用いられているが、ウェルビーイングでは自己評価が求められる。本研究が開発したJ-SCWBSは自記式尺度であり、子どものウェルビーイングを促進する小学校の教育活動において有効に使用できると期待できる。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　西田　千寿子　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教　授	清水　栄司
	副 査　教　授	土屋　賢治
	副 査　准教授	奥野　裕子

論文審査の結果の要旨

ウェルビーイングを促進する教育において、子ども自らが回答する自記式尺度が必要であると考え、本研究では、日本の児童を対象とするウェルビーイングのセルフ・レポート尺度の開発を研究目的とした。

本研究では、イギリスで開発されたスターリング・チルドレン・ウェルビーイング・スケール（the Stirling Children's Well-being Scale :SCWBS)を翻訳し、J-SCWBSを作成した。SCWBS (Liddle & Carter, 2015) は、8～15歳の子どもを対象とする15項目5検定の自記式尺度で、信頼性と妥当性が検証されている。15項目は3部に分かれ、ポジテイブな感情（主観的ウェルビーイング）を測る6項目、ポジテイブな展望（心理的ウェルビーイング）を測る6項目、社会的好ましさ(Social Desirability: SD)を測る3項目で構成されている。翻訳するにあたって、まず、SCWBSのコピーライトを有するスターリング・カウンシルより、J-SCWBS作成の許可を得、自記式尺度のクロスカルチュラルアダプテイションガイドラインであるBeaton Guidelines (Beatonら, 2000) の手順に従って訳した。和訳には2名、バックトランスレーションには1名と外部団体（翻訳会社）が当たった。4名による検討委員会を設置し日本の文化・環境に適応したアセスメントになるよう議論を重ね、J-SCWBSを作成した。

J-SCWBSとともに、WHO-5（ウェルビーイング尺度）、SSSC（ソーシャルサポート認知尺度）、SDQ（強さ困難さのアセスメント）を併用し、妥当性をピアソンの相関係数で検証した。ただし、SDQの児童用自記式版は、8歳からの適用となっているので、1・2年生（6・7歳児）については、SCWBS、WHO-5、SSSCの3つを使用した。信頼性は、内部一貫性、再検査信頼性を用いて検証した。

社会文化的適応を図るためのガイドラインに沿って開発されたJ-SCWBSは、信頼性と妥当性が確認され、日本の学校において有用な尺度であると示唆された。しかし、低学年（1・2年生）では、中・高学年（3年生以上）に比べて、有意な値ではあるものの低い値が見られた。低学年児童に対する実施には適切な指導が必要であるという教員のフィードバックに一致すると考えられる。しかし、パワー計算を行ったところ、低学年児童の参加者数（N=46）は有意な相関係数を得るためには弱かったと示唆される結果がでた。今後の研究において明らかにする課題である。

SDを測る3項目は、イギリスでの研究結果よりも5.7倍高い値が示された。社会文化的な背景、他の質問紙内容との関連など多様な要因が考えられる(Kawauchi, 2009)。Cameriniら(2018)のウェルビーイングの研究において、SDは家族関係とピア関係を有意に予告するという結果があり、研究者らは子どものウェルビーイング尺度にSDは必要であると主張する。一方、Caputo(2017)は、ウェルビーイング尺度とSDの相関は高くなるので、SDを含むのは無意味であると述べている。SDの必要性や役割については今後の研究において検討したい。

本研究は次の点において評価できる。1、イギリスで開発され有効に使用されている子どものウェルビーイング尺度をガイドラインにそって翻訳し日本語版を開発した点、2、日本の小学校におけるデータにより信頼性と妥当性を確認した点、3、日本の学校で進める子どものウェルビーイング促進に活用できる点。一方で今後の研究課題があげられる。参加者は一地方の一小学校児童であり一般化できるサンプルではないこと、サンプル数が小さいこと、SDの3項目をどう解釈するかの3点である。

本邦においては、子どものウェルビーイングを測定する場合、保護者や関係する大人の評価が主に用いられているが、ウェルビーイングでは自己評価が求められる。本研究が開発したJ-SCWBSは自記式尺度であり、子どものウェルビーイングを促進する小学校の教育活動において有効に使用できると期待できる。

本研究によって開発されたJ-SCWBSは、日本の子どものウェルビーイングの理解とその促進に役立つ尺度として活用できる可能性を初めて科学的に示した点で非常に価値あるものであり、学位（博士）に値する。